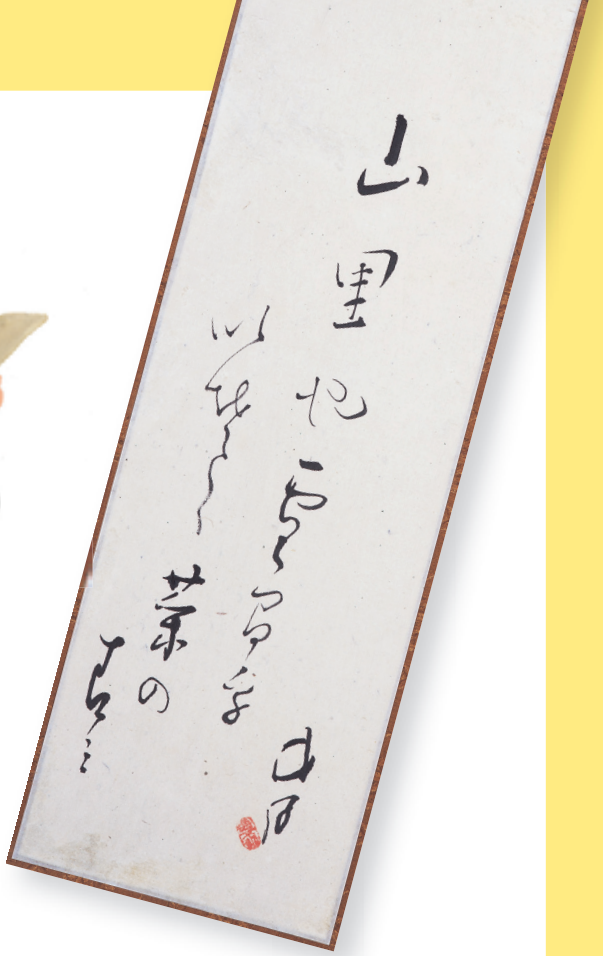
俳句は世界で一番短い詩



井月さんの生きる糧ともなった俳句は、五・七・五の十七文字からできていて、世界一短い詩だと言われています。俳句を作るには、手帳と鉛筆があればよいだけです。短い形で親しみやすく、だれにでも作ることができます。俳句は、手紙や報告文などとは違うので説明や理屈は言いません。ただ、五・七・五というリズムの中に、喜びや悲しみ、感動など、作者の一番伝えたい気持ちを込めて作ります。

「なんだかむずかしそう」「文字数に限りがあると全部伝えられない」と思うかもしれませんが、そんなことはありません。

次の二つのステップを踏めば、あなたにも簡単に俳句が作れます。

ステップ1 五・七・五のリズムに言葉を入れてみよう

はじめから良い句を詠もうとしてもなかなかうまくはいかないものです。まずは『五・七・五』の十七音に、今日の出来事やその時の気持ちを当てはめてみましょう。

例えば、「**今日、習字の時間に一所懸命になり過ぎて墨が顔についてしまった。周りを見たら友達の顔にも同じように墨がついていた**」という情景を思い浮かべて、

「習字して墨つけた顔楽しいな」

と言葉を入れると、これだけでも、大分俳句っぽくなります。

ステップ2 季語を使ってみよう

俳句の世界では、季語（季題とも言います）があります。季語とは、四季の自然、生活、行事など、自然・人間・文化のあらゆる事柄から、日本人の美意識によって選ばれた、すぐれた言葉であり詩語です。季語には、春、夏、秋、冬の四季に新年を加えた五つの区分があり、それぞれの季節を表す言葉があります。

昔使っていた暦（陰暦、旧暦）では、春は一月・二月・三月、今の暦の二月・三月・四月にあたります。夏は五月・六月・七月、秋は八月・九月・十月、冬は十一月・十二月・一月となりますが、正月は新年として独立させることが多いようです。

ステップ1で作った俳句の一部を季語に変えるとより素晴らしい俳句になります。

「たのしいな」や「うれしいな」など気分がポカポカしてくるような感情は、そのまま表さず「春の風」と置き換えるとよいでしょう。

「習字して墨つく顔に春の風」

習字を習うときは、最初はじっとしていますが、次第に飽(あ)きて来てそのうちに隣(となり)の子を突(つつ)いたり、筆を持って騒(さわ)ぎだしますね。あげくにどの顔も墨だらけという情景はなぜかほほ笑ましく、春のやさしさとか暖かさが感じられるのです。

それを「春の風」という季語で表現していると言えるでしょう。そういえば、井月さんの句に

「春の日やどの児の顔も墨だらけ」

というのがありますね。寺子屋で筆字を習っている子供たちの動きを井月は見ていたのでしょう。

俳句の季語は一万数千ほどありますが、結果として使用されている季語は数が限られています。全部覚える必要もなく、季節ごとに季語を整理した「歳時記(さいじき)」というものがあります。

みなさんは季節ごとの季語ってどんな言葉を想像しますか？

次に季節ごとに具体的な季語にどのようなものがあるかを見てみましょう。

季語のいろいろ

春

たんぽぽ
遠足
桜
潮干狩り（しおひがり）
クローバー
梅
ひばり
つばめ
花吹雪
春風
など

夏

風鈴（ふうりん）
あじさい
せみ
かたつむり
こいのぼり
かっこう
竹の子
新茶
若葉
川遊び
水泳
夏の海
など

秋

もみじ
いがぐり
虫
七夕
天の川
流れ星
赤トンボ
コオロギ
さんま
など

冬

雪
日向ぼっこ
うさぎ
白鳥
枯葉（かれば）
にんじん
風邪（かぜ）
オリオン座
大晦日（おおみそか）
こたつ
スケート
など

新年

初日の出
書初め
元旦（がんたん）
お雑煮（ぞうに）
こま
羽根つき
初詣（はつもうで）
など

俳句の歴史を学ぼう！

室町・戦国時代
1336年～16世紀末

低俗（ていぞく）・滑稽（こっけい）な内容の「俳諧（はいかい）」が流行、「俳句」の基となる

▼

江戸時代
1603年～1868年

松尾芭蕉（まつおばしょう）が俳諧を、幽玄（ゆうげん）・閑寂（かんじゃく）を重んずる詩文芸にまで高める

▼

与謝蕪村（よさぶそん）・小林一茶（こばやしいっさ）が芭蕉（ばしょう）の姿勢を引き継（つ）ぎ、活躍（やく）する。

▼

井月さんの時代
1822年～1887年

▼

明治時代
1868年～1912年

正岡子規（まさおかしき）が俳諧（連句（れんく））の発句（ほっく）（五・七・五）を独立させ俳句とする

▼

大正時代
1912年～1926年

高浜虚子（たかはまきょし）が活躍

▼

昭和時代
1926年～1989年

自由律（じゆうりつ）俳句・無季（むき）俳句なども始まる

▼

今
1989年～

「HAIKU（はいく）」が世界でも流行する